

# ねじを巻く時間だった



「久々に校歌の歌詞を見て、質実剛健な学校だったことを思い出しました」と振り返る大島博さん



手術して元気になった子どもの成長を見るのが何よりの幸せという笠原群生さん

間必死で頑張ることは大切なんだと気がついた」  
2浪の末、群馬大学医学部に入学。愛をこめて「愛人の集まり」と呼ぶ友人たちと、充実した6年間を送った。

卒業後は、自分の手を使って治したいという思いから外科医に。手先が不器用で、手術があまりうまくなかったことから、糸を結ぶ練習を毎日1万回繰り返した。「患者のためだと思うと、別人のように頑張れた」  
現在年間70〜80回の手術をこなしながら、月2、3回は海外で新興国の病院の医師に手術指導を行っている。

士運用技術ユニットの大島博さん(59、1976年卒)は、宇宙飛行士の健康管理を支援する医師。宇宙では重力がほとんどないことで骨の量が少なくなったり、閉鎖空間にいて非常に強いストレスを感じたりする。そのような問題を解決するのが任務だ。

宇宙へのあこがれを抱いたのは中学生の時。1969年、人類初の月面着陸をテレビで見たのがきっかけだった。  
小、中と優秀な成績で生徒会長を務める。優等生だった大島さんがスランプに陥ったのが、高校時代だった。

70年代の安保闘争(日米安全保障条約の改定に反対して起きたデモ)で暴力が報道されるたび、「勉強して大学に行ったら果てはこうなるのか」という失望感を抱き、勉強一筋になれなかった。

ただ、科学へのあこがれと人の役に立ちたいという思いがあった。富山大学医学部に入学し、整形外科で学ぶ。留学先のイギリスから戻ったころ、向井千秋さんが宇宙に行くことを知り、JAXAの医学研究に進むことにした。

「高校時代の一休みがあったからこそ、本当に好きなことを見つけられた」

ただ、漠然と感じていたのは「子どもがあこがれる仕事につく」ということだった。今につながっている。  
医者である父親の影響で、医学部を志す。だが、大学入試に失敗し、上京。予備校で初めて勉強をする習慣を身につけた。「しんどかったけど、一定期

「高校時代は、大人になってやりたいことに突き進むためのねじを巻く期間。前高はゆっくりペースのぼくも尊重してくれた」  
宇宙航空研究開発機構(JAXA)の宇宙飛行